



HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|------------------|---|
| Title | サヴィニーのパンデクテン講義（2） 一一八四〇／四一年冬ゼメスター講義の国際私法の部分について |
| Author(s) | 櫻田, 嘉章; SAKURADA, Yoshiaki |
| Citation | 北大法学論集, 35(5), 134-105 |
| Issue Date | 1985-03-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/16463 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 35(5)_p134-105.pdf |



サヴィニーのパンデクテン講義（2）

—— 一八四〇/四一年冬ゼメスター講義の
国際私法の部分について ——

櫻 田 嘉 章

〈前書き〉

サヴィニーのベルリン大学におけるパンデクテン講義についてはその聴講学生によるいくつかの筆記録が現存していることが知られているが、1840/41年冬ゼメスターの講義についても本誌（33巻3号954頁以下）において既に紹介したクックの筆記録の外にグレニングのそれが存在することが知られていた。そこでクックの講義の筆記録の正確さを検証しひいては1840/41年冬ゼメスターのパンデクテン講義（特に国際私法に関して）をできるだけ忠実に再現し、従来の研究の欠落部分を補填するためにもグレニングの筆記録の検討が望まれた。幸いにもそれを所蔵していたマールブルク大学図書館の御好意により、同手稿を閲覧、解読することが可能となり、ここに公刊するのが(A)である。しかもこの筆記録を閲覧する為に訪れた際に同図書館の所蔵するサヴィニーの遺稿類を全体として閲覧する機会を得て多くの興味ある新しい事実に接したのであるが、遺稿類の中にサヴィニーのパンデクテン講義に関する資料、なかんづくサヴィニー自身の手になる同講義のノートを発見し、そのうちの国際私法の部分だけをとりだしておこしたものが(B)である。ちょうど Deutsche Forschungsgemeinschaft の財政的援助により同遺稿類の全体的な整理とカタログ化が進行中であったので、勿論抵触法についての資料の存否自体は全く不明ではあったが、資料全体の検索のオリエンテーションに極めて貴重な便宜を得ることができたので、短時日のうちにこのような幸運な発見をなしたのであった。その結果少なくとも1840/41年のサヴィニーのパンデクテン講義についてはその講義を聴講した2人の学生の筆記録と、その講義の元となったサヴィニー自身のノートの内容が明らかとなったわけで、

完全とまではいえないものの他に記録の手段のなかった当時の講義の内容が大よそ再現されうる見通しとなった。その内容についての比較は後に述べる。

サヴィニーのベルリンにおけるパンデクテン講義は1810年からはじめられ1841/42年冬ゼメスターまで続けられた(但し後掲付表のように1826/27年冬ゼメスターは休講の様相)のであるが、サヴィニー自身がこれらの講義の内容・時間配分に関するメモを残しているので簡単に紹介し、最後に一覧表としてまとめておこう。

サヴィニーのメモは筆者の記録によれば、Ms 925 の M 8 第 1 Konvolut の Blatt Nr. 1-30 の 1 片の小紙の各々に(その後新しいカタログ・ナンバーが図書館によって付されたが不明)その年のパンデクテン講義の内容と進行の順序、時間配分、各講義期間が記されており、特に記録すべき事項(例えば1813/14年冬ゼメスターの開始日は1813年10月18日であり、「ライプツヒの戦いの日に」とコメントされている)が簡潔に書かれている。例えば1812年は夏ゼメスターであり(どういふわけか1810年の講義の記録が筆者のノートには控えられていないので、一覧表においても空白となっている)、1週間12時間のペースで4月20日に始められ序論2時間(4/20)、第1篇25時間(4/21-5/1)、第2篇65時間(5/2-6/12)、第3篇67時間(6/13-7/18)、第4篇41時間(7/20-8/6〔2時間〕)、第5篇18時間(8/6〔1時間〕-8/13)、第6篇3時間(8/14)の計214時間が8月14日に終えられている。1日に2時間講じられたらしいので、毎週6日間ということになる。後掲付表から明らかのように第5篇が1820年夏ゼメスター以降削除されるまで平均して200時間をはるかに超えていた講義時間数が次第に170~180時間まで下がり、一旦1824/25年冬学期から廃された第6篇が1832/33年冬学期以降序論、第1篇と共に再び講じられてい

(3)

る。1813/14年冬学期の記録には、序論の次には、物権法(Sachenrecht)、債務法(Oblig. recht)、親族法(Familienrecht)、相続法(Erbrecht)、Restitutionと順次記されているので、これに従えばどうやら第5篇は相続法、第6篇はRestitution

(4)

ということになる。ローマ相続法についての講義は別の記録によれば(資料の整理に当たられたBredehorn夫人作成のカタログのコメントによる)マールブルク大学の1802年の講義案内上サヴィニー自身のプラン(従ってハイゼのものでない?)に従い週3回講じられ、更にサヴィニー自身の追加書き込みがベルリンの1810-21年にある

(5)

というので、或いは1820年、1821年にも別の形でサヴィニーのパンデクテン講義のこの部分が講じられた可能性を否定しきれない。しかしどうやらローマ相続法はベルリン大学においてはこのころパンデクテン講義から分離されて独立の形式を与えられた

ようで、そのためにサヴィニーの講義の内容が変更されたものであろう。⁽⁶⁾また1820年を例外として、1813年以降はこのパンデクテン講義は冬semesterに割り当てられている。念の為最終講義の時間配分を記すと、第1篇第6篇と共に序論が10月25日から11月27日まで50時間、第2篇は11月29日から1月7日まで42時間でその内訳は第1章第2章が11月29日から12月10日(18時間)、第3章が12月11日から12月18日(12時間)、第4章が12月20日(2時間)、第5章が12月21日から1月7日(10時間)、第3篇は1月8日から2月28日まで72時間で、その内訳は、第1—4章が1月8日から1月28日まで(30時間)、第5—7章が1月29日から2月28日まで(40時間)、第4篇が計10時間で3月1日から同5日までとされている。問題となる1840/41年については筆者のメモの不備で最終講義ほどの詳細は不明であるが、序論・第1篇・第6篇47時間が11月12日から12月14日、第2篇36時間が12月15日から1月21日、第3篇が38時間、第4篇20時間が3月5日から3月19日までとなっている。第6篇にあまり時間がさかれないとすると、私法方法論及び国際私法を扱っている序論と第1篇の時間が相対的に増加している点が注目される。

さて、(A)の筆記者 Albert v. Gröning は Bredehorn 夫人のコメントによればベルリン大学の1839/40年冬semesterから1841年夏学期までの法学の学生であり、後に法学博士及びプロイセンのカンマー・ゲリヒトのアセッソールとなったことが分っているが(vgl. Gotha. Briefadelige Häuser 1 (1907) S. 238) その余は不明である。⁽⁸⁾(B)についてはサヴィニーのパンデクテン講義はハイゼのプランに従っていたことが知られているが、Ms 925/37(1)のBlatt Nr. 31によると1807年 Heidelberg として nach Heise's Grundriß としており、サヴィニー自身の講義ノートもこの事実を確認している。しかし随所に新しい入れ替え部分や書き込みが認められ、前述した形式的変更もあるので、ハイゼの体系とサヴィニーの体系の関係及び変更、その意義については一考を要する。

次に「体系」とパンデクテン講義の関係であるが、特に抵触法については「体系」執筆の資料の中に次のような箇所があるので紹介しておこう(Ms 925/11, Bl.16)。
「プフタ・パンデクテン 110 節を参照。

これら法源の他の法源と抵触する場合の適用について。——又は：この法源の適用の限界について、その具体的な妥当がある国家に前提されている場合。

序論。この見方は本来我が実定法の外にあり、従って付加(Zugabe)の性質を有している。」

としこの註において

「この実定法にどの人、物、行為が服すべきか。これらの服従の限界は同時に我が実定法の適用可能性の限界であり、この限界画定 (Gränzbestimmung) は当然我が法の完全な知識に属している。従ってそれは我が法と抵触している法の招致 (Zuziehung) ぬきではありえない。」としている。

更に続けて本文で

「——本質的には他のどの実定法の領域においても同様に生じうるのであって、それ故普遍的性格 (Character von Allgemeingültigkeit) を有している。

この抵触は二様の対立に依りうる。

I. 場所的対立——更に二つの場合がある。

1. より狭い領域内で妥当する2つの法律の、我が法の一般の支配 (Aberherrschaft) の下での抵触 (これは特別法と一般法のそれでない)。
2. 我が法と外国のそれとの抵触。4^l—4^p。」

また「II. 時間的対立——法源の内容によるものではなく、発展形成する立法の仮定的状態による。4^g—4ⁱⁱ」とする。

(B)は後述のようにこの 4^l—4^p に相当するので、「体系」はパンデクテン講義のこの部分を利用して執筆されたことが分る。従って「体系」の成立史をパンデクテン講義のうちに探ることは誤りではなかったといえる。

それではサヴィニーのパンデクテン講義のノートの執筆時期はいつであったのであろうか。勿論多くの後からの書き込みや訂正があったことが一見明白であるので、完全に特定することは不可能であろうが、少なくとも抵触法の部分については以下のことがいえる。(B)の部分は、総則の中に含まれており、それに先行するパラグラフとの関係を見れば、サヴィニー自身の付したナンバーによれば 4^d, 図書館のナンバーで Bl. 41, 即ち(B)の直前の部分に (B)は 4^l (Bl. 48) からはじめられている) Neu, Winter 1830/31 という書き込みが存在する。そしてその後 Neu die einz(ellen) §§ des Kap(itels) として § 10. 11 Schon in der Einf(ührung) abgehandelt... 以下 § 17 までのタイトルが示されている。従ってこの部分は少なくとも(B)の第1頁に直接に連続し、特に § 10—17 と § 18 の表示以下の間に不接合を示すものは認められない。ただ 4^d (Bl. 41) に更に先行する Bl. 31 はパンデクテン講義の実質上の冒頭部分であるが、前述したように Pandekten nach Heise's Grundriß Heidelberg 1807, それに続く Bl. 34 には Pandekten—zu 北法35 (5・131)669

Heise's Grurdriß Einleitung u. Kap. 1 (Neu, Winter 1829/30) とあるので、必ずしも断定を許さないが、抵触法の部分は少くとも 1830/31 年以降はこのノートの形で講義が準備されたものと思われる。この点は 1830/31 年より前の時点で行なわれた講義の筆記録を検討することでいずれ明らかにしたい。

次に(A)(B)及びククックのノートの内容についてふれておく。同じく学生の筆記ノートである(B)とククックのノートの内容は、分量的にもほぼ同じであることから予想できるように、際だちちがいを示していない。しかし同一の講義を聞いてもその受け取り方に若干のちがいが生ずるのは当然であって、例えば表題に *Gesetze* という語が入っていたりいなかったりするような小さな差異、あげられた例の叙述の有無の外、部分的叙述の精粗にちがいはある。両者をサヴィニー自身のノート(B)とつきあわせて、彼の講義の模様を推測するという目的からいうと、より重要なのは、(B)と(A)とククックのノートのちがいであるが、ここにおいても概ね決定的な違いはないといつてよい。しかし気付いたことを述べると、(1)実際の講義においては若干の形式的変更があった、(2)内容的に講義で敷衍している部分があること(特に註の部分や例)、(3)ノートにだけ叙述のある部分があること、があげられる。(1)については、人の渉外の活動による個別問題がノートでは3つに分けられているが、現実には2つにしぼられ、*locus regit actum* は各論的に論じられていること、また最後の、ノートでは(6)に相当する部分が講義では極めて簡単にまとめられ、もはや抵触法の各論の部分からはずされていると思われること、が特に指摘できる。(2)についていえば、ローマ法の説明(*origo* と *domicilium*)は実際にはずっと詳細に講じられたようであり、随所に例があげられている。(3)についても、導入部分が現実の講義では削除され、また文献解題・引用も必要最少限におさえられていることが指摘できる他、国際刑法の部分を抑え、後にサヴィニーの「公序」の部分として注目されるに到る強行法についての叙述が講義の中ではふれられなかった模様であることが注目される。⁽⁹⁾総じていえば、この講義においては後の「体系」第8巻で極めて重要な原理となった、いわゆる形式的原則もまた国際法共同体の観念も姿をみせず、従ってその後の書き込みの故にその最終的な成立の年代の確定の困難なサヴィニー自身のノートである(B)も、ほぼ1842年以降講義自体の終了と共にもはや手を加えられることがなかったと考えても大旨誤りとはいえないものと思う。前述の「体系」の資料が示すようにパンデクテン講義の内容が「体系」の重要な基礎となりえたことは事実であるが、その場合にも講義ノート自体に加筆している様子はないのである。従って今後ここで部分的に明らかとなっ

(付表1) パンデクテン講義の構成とその時間的配分

| Gliederung | Jahr | 1811 | 1812 ^(c) | 1813/14 | 1814/15 | 1815/16 | 1816/17 | 1817/18 | 1818/19 | 1820 | 1821/22 | 1822/23 | 1823/24 | 1824/25 | 1825/26 | |
|---------------------------|---------------------|-------------------|---------------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|------|---------|---------|---------|---------|---------|----|
| | 1810 ^(a) | SS | SS | WS | WS | WS | WS | WS | WS | SS | WS | WS | WS | WS | WS | |
| Einleitung | 筆者の | 16 ^(b) | 25 | } 18 | } 42 | } 28 | } 28 | } 24 | } 26 | } 36 | } 36 | } 30 | } 34 | } 34 | } 34 | |
| 1. Buch | の | 22 | 18 | | | | | | | | | | | | | |
| 2. Buch | メモ | 68 | 65 | 66 | 54 | 52 | 62 | 44 | 46 | 46 | 50 | 48 | 48 | 57 | 48 | |
| 3. Buch | 紛失 | 80 | 67 | 72 | 98 | 92 | 90 | 70 | 86 | 76 | 86 | 79 | 90 | 79 | 72 | |
| 4. Buch | の | 46 | 41 | 46 | 34 | 42 | 28 | 34 | 36 | 24 | 28 | 20 | 32 | 19 | 23 | |
| 5. Buch | 不明 | 19 | 18 | 24 | 21 | 24 | 24 | 31 | 31 | — | — | — | — | — | — | |
| 6. Buch | | 2 ^(d) | 3 | 2 | 4 | 3 | 4 | 3 | 2 | 5 | 3 | 1 | 1 | — | — | |
| Gesamt-Stundenzahl | | 253 | 214 | 228 | 253 | 241 | 236 | 206 | 227 | 187 | 203 | 178 | 205 | 189 | (177) | |
| Blatt Nr. 但し櫻田の閲覧当時のもの | | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 |

(a) 筆者のノートの記録紛失

(b) methodische Einleitung となっている。

(c) Gliederung が本文のように他と変っている。

(d) 筆者の記録によれば 7. Buch となっており、講義の順序も、3. Buch の終わりの方ではなされている。しかし、6. Buch の間違い(筆者又はサヴィニーの)ではないかと思われる。

(付表2) パンデクテン講義の構成とその時間的配分

| Jahr Gliederung | 1827/28 WS | 1828/29 WS | 1829/30 WS | 1830/31 WS | 1831/32 WS | 1832/33 WS | 1833/34 WS | 1834/35 WS | 1835/36 WS | 1836/37 WS | 1837/38 WS | 1838/39 WS | 1839/40 WS | 1840/41 WS | 1841/42 WS |
|-------------------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|-----------------------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| Einleitung | 40 | 38 | 40 | 50 | 40 | 46 | 39 | 34 | 44 | 40 | 49 | 46 | 47 | 47 | 50 |
| 1. Buch | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2. Buch | 58 | 54 | 58 | 54 | 50 | 45 | 45 | 40 | 44 | 40 | 40 | 38 | 40 | 36 | 42 |
| 3. Buch | 74 | 86 | 84 | 70 | 81 | 81 | 72 | 68 | 74 | 66 | 62 | 62 | 76 | 38 | 72 |
| 4. Buch | 26 | 24 | 24 | 23 | 20 | 27 | 26 | 27 | 26 | 26 | 22 | 24 | 18 | 20 | 10 |
| 5. Buch | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 6. Buch | — | — | — | — | — | mit Einlei- tung u. B. 1 | | | | | | | | | |
| Gesamt- Stundenzahl | 198 | 202 | 206 | 197 | 191 | 199 | 182 | 169 | 188 | 172 | 173 | 170 | 181 | 161 | 174 |
| Blatt Nr. 但し櫻田の聞 覧当時のもの | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

た1840/41年の2つの筆記録とサヴィニーの講義ノートから当時の彼のパンデクテン講義の全容を探ることは原則として方法論的に誤っていないはずである。同時に「体系」で新たに提示された部分の成立史は、今後他の資料によって検証する他ないことになる。⁽¹⁰⁾

最後に(A)(B)の公刊を快よく御許可頂いたマールブルク大学図書館長 Barth 博士、そしてこの許可の取得に御尽力頂いた同図書館手稿・稀観本部門の主任である Bredehorn 博士には、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。特に Bredehorn 博士は、私の最初のマールブルク訪問以来常に圖書の閲覧の便宜を図って下さったのみならず、サヴィニーの遺稿の利用・検討に際しては常に貴重な助言を与えられたのであり、更に手稿類の複写は全て自らの手でされたのであって、同氏の助力がなければ私の拙いサヴィニー研究の進歩は考えられなかったといえる。特に、私の手元にある複写類では明確に解読できない部分が生じるのは避けがたく実際上判読不能の若干の小部分が残されたが、同氏は手間をいとわず私の提した疑問の全てを原本に当て解いて下さった上に、公刊のスタイルその他についても専門家の立場から貴重な御意見を与えて下さったのであって、前回の場合よりも今回の方が解読の完成度においてより高いとすれば、それはひとえに Bredehorn 博士のおかげであるといつてよい。又同博士夫人は遺稿の整理に当っておられたが、なれない私に整理中の資料リスト及びそのコメントの閲覧を許される等図書利用上極めて有益な示唆を与えられ、又同図書館員である Kadel 博士は、サヴィニー遺稿関係の論文の抜き刷りを与えられる等多大の励ましを頂いた。私の研究を支えて下さったこれら全ての方々に厚く御礼申し上げる次第である。⁽¹¹⁾

一 註 一

- (1) 一般的にはとりあえず石部雅亮「サヴィニー研究の新局面(上)」(書齋の窓322号所収)39頁以下参照。プロイセン一般ラント法講義については石部雅亮・野田龍一「イェーニゲン稿『サヴィニー・プロイセン一般ラント法講義』(1)」・法政研究48巻1号196頁参照。
- (2) Vgl. Festgabe der Deutschen Juristen-Zeitung zur Jahrhundertfeier der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, hrsg. v. O. Liebmann, Berlin 1910, S. 5ff. u. 73 によれば毎週2時間とされており(1810年)、栗城寿夫「ドイツの大学における法律学科目の講義の歴史」・法学雑誌21巻3号41頁以下の記述からみても、これはその後も変化しなかったように思われる。尚一般的には、石部雅亮「法典と法律学(1)——『サヴィニー・プロイセン一般ラント法

- 講義』の研究のために——」・法学雑誌27巻3・4号113頁以下参照。
- (3) サヴィニーのパンデクテン講義はハイゼのプランに従っていたが(拙稿「サヴィニーのパンデクテン講義」北大法学論集33巻3号953頁参照), 次第にそれが修正されていった。特に講義の形式的順序については, サヴィニーの所有していた Heise, Grundriß の第2版(1816)(Ms 925/2002)の書き込みがそれを示している。尚ハイゼのプランについては, 野田龍一「サヴィニーとプロイセン一般ラント法——1824年講義ノートの研究(1)——」・法政研究48巻3・4号参照。野田論文によってもサヴィニーのプランの変更が傍証しうるであろう。
- (4) ハイゼのプランに概ね従って, サヴィニーのノートは, 序論, 第一篇総則, 第二篇物権法, 第三篇債務法, 第四篇親族法, 第五篇相続法, 第六篇原状回復と構成した模様である。ブレーデホルン夫人のコメントからもそのことは読みとれるし, 筆者の有している複写の中にもそのことを示す記述がある。
- (5) Ms 925/[olim M 7b](旧表示)のブレーデホルン夫人のコメントによる。
- (6) 栗城・前掲論文に引用されている Vorlesungsverzeichnis によれば, 1830/31 WS にはサヴィニーがパンデクテンを12時間(週), ルドルフが相続法を4時間(週)講じる旨記されている。なお後掲付表が示すように1824/25 WS から講義の編成が変わっているので, 或いはプロイセン一般ラント法の講義にもこれが影響したかもしれない。この点で野田・前掲論文の対象としていた講義録はちょうど微妙な時期にあり一般化をする為には検証を要するように思う(特に603頁以下)。
- (7) 一見して明らかのように, 30時間と40時間の合計は70時間で2時間分不足している。これが私のノートの誤記によるものか, サヴィニー自身の誤記によるものかは, 今のところ断定できない。
- (8) Ms 925/[olim M 21](旧表示)による。
- (9) プロイセン一般ラント法とパンデクテンの講義の相互関係は今後検討を要すべき問題であろうが, 少なくとも1824年段階のプロイセン一般ラント法の講義の中で取り扱われている抵触法の理論は伝統的条例理論を踏襲しており, 人法, 物法, 混合法を基本とし, 特に動産・不動産区別主義に従っていたことが明らかにされている(石部・野田, 前掲論文(註(1))(2)・法政研究48巻2号459頁)。パンデクテン講義がその当時どのようなものであったかについては目下検討中である。
- (10) 特にいわゆる形式的原則と国際法的共同体の観念の由来が重要である。「体系」における抵触法の部分の成立についての手掛りといえば, Ms 925/11 Bl. 3 は第一篇総則について, 「総則自体が法律関係のみを対象とすることになるように, 序論と第一章, 第六章を前置すべきか?」という後からの書き込みの後に, 「第一章. 法源とその適用, 第二章. 法律関係の対象と分類について, 第三章. 法律関係の主体としての人について, 第四章. 法律関係の発生と消滅について, 第五章. 権利の侵害に対する保護について, 第六章. 他の法源との抵触におけるこれらの法源の適用とこの適用の限界について」(下線部分は後から書き加えられた

部分、第二章と第三章は訂正前は逆に第三章、第二章と表示されていた。)としており、「体系」が結局サヴィニーの意図したパンデクテンの全体ではなく総則部分で終わってしまったことを考えると、最終的にはこの書き込みの順序ではなく当初のプランに従ったことが分る。従って、ハイゼの体系から離れて抵觸法が最後へ移され、法源自体とその限界が切り離されるが、抵觸法は法律関係を対象としていたことが認められる。更に Ms 925/11 の Bl. 4 は「体系」の特別の目的の一つに、「即ちローマ法がいかにして普通ヨーロッパ法 (gemeines Europ. R.) となったか」をあげている。また前にふれた Ms 925/11, Bl. 16 はその冒頭欄外書き込みにおいて「本章の自然な構成 (Natürl. Gang): 法律 (Gesetze) の適用、或いはその支配の限界:

1. 法律がそこで法律関係を支配している自然な領域 (natürliches Gebiet): 抵觸, …… (略)
2. この自然な領域内における任意の (willkührl.) 制約。一般的法律と特別の法律…… (略)]

と述べている。従って法律関係の性質により服すべき法域という考え方も、サヴィニー自身の実定法論の自然な発展であり、また抵觸法が一国の実定法の制約を超える普遍的性格をもち、ローマ法がヨーロッパ普通法として機能する限りその法源論が避けがたいことも予測できるが、その具体的な成立のプロセスはなお今後の研究に待たなければならない。尚、グレニングの講義ノートには国際法にふれた部分があるが、そもそも法源論の中で国際法をどのように扱っていたのかは早急に検討を要しよう。またサヴィニーのノートと学生達のノートの相違の一つにあげられた最後の部分、即ち訴訟法や刑法の適用関係が実際の講義においては独立のナンバーを付されず短縮されているのであるが、グレニングのノートにおいてこれらが「非私法的」であるとの叙述があり、パンデクテン講義を一般私法論として理解すれば、その「体系」への移行において異質な要素が更に整理・削除されたことになる。

- (ii) <前書き>中では遺稿の図書ナンバーが統一されておらず読者を混乱させるであろうが、これは筆者の滞独中にマールブルク大学図書館を訪問した際には未だ最終的なナンバーが完成しておらず、従って複写や筆者の記録したノート類に残されているのが仮のナンバーであり、(一部は後に伝えられた新しい確定ナンバーでおきかえられたものの) 少なからずそのまま引用せざるをえなかったことによる。Ms 925/ の後にし] で olim M ... とあるのがこれである。またサヴィニーのノートにはサヴィニー自身の付したナンバーの他に、図書館で整理のために付したものが、Bl. ... と記されるものは特に断わらない限り後者であった。Ms 925/11 のように記されたものが現在用いられている図書ナンバーである。

(追記) 本研究は昭和58年度文部省科学研究費一般研究(C)に負うものである。

〈凡 例〉

公刊に当っては極力原資料の元の形を伝えるべく努めたが、手稿としての性質上解読に際して、或いは印刷の形式上若干の変更を余儀なくされた箇所がある。必要なものはその都度脚注の形で（*印）示しておいたが、更に次の諸点に留意されたい。

(1) 原手稿の頁建ては(A)については〔 〕、(B)については整理用通し頁番号を〔 〕で示した後に（ ）の形で頁毎に挿入した。(B)は一枚の用紙の表と裏に書かれているので、Blatt のナンバーで、例えば〔Bl.12〕は12葉目の表を、〔Bl.12v〕はその裏を示しておいた。

(2) 原手稿で用いられている略号のうち定冠詞については読み易さを考えて ds=das 又は des, dr=der という風に表示し、特に読み方に疑問が生じる場合にはその旨脚注（*）で指示した。また θ =nicht, ϕ =aus のような略号も通常の対応するドイツ語に直して記した。(A)に特に多く現われる同一子音が一つ省略されている場合（例。Abstam(m)ung, ken(n)t, in(n)ersten, kan(n), wen(n), Trüm(m)ern etc.）には本来の単語の形で示し特にその旨表示しなかった。又、(A)で特に多用される、e や u の省略のうち一般的なもの（例。unt(e)r, p(e)rsönlich, V(e)rtrag, allgemein(e)r, Bürg(e)r, dies(e)r, all(e)r, besond(e)rs, d(u)rchs etc.）は特に表示することなくそれぞれの語の普通の形で示しておいた。

(3) ドイツ語において一般的に用いられている略号についてはそのまま記した（例。z. B., s. o. etc.）。u が und の略号として用いられている場合にはそのままとしたが、u だけで表わされている場合には u(nd) と補った部分を（ ）に入れて示した。v も一般にはそのままで用いたが(A)においては von（又は vom）を原文に従って用いた。od. も u. の例に従った。

(4) 本人が自ら用いている略号のうち法律用語はできるだけ復元して示した（例。R(echt), Ges(etz) etc.）。ラテン語の用語は、初出の場合に完全な形に補って示し、それ以外は略された形のままにしておいた。

(5) その他の略号は文脈からみて容易に本来の形が推測されうる場合には特に省略されている部分を補うことなくそのままで示した（例。volksmäß., ledigl. etc.）。ただ、b(ey) や fremd(en), hab(en) のように(B)で語尾が省略されている場合には理解の便宜のために完全な形に復元した。(B)でサヴィニー自身の付した註記の部分では既に本稿のどこかで完全な形が復元されており、誤解が生じない限りスペースの関係からサヴィニー自身の省略法に従って記した。

(6) サヴィニー自らの註記は +, ++……の形で示し、櫻田の付した註記は *, **……の形で示した。サヴィニーが施した削除、書き込み訂正や形式上特記すべき事項は*の脚注で指示した。

(7) 大小字が小文字か、B等については文脈と文字の形から判断して決めたが、その解釈が文意に変更をもたらしうる場合には脚注で表示した。

(8) それ以外においても特記すべき事項については脚注で説明した。アンダーラインその他の形式は原文に従った。(B)は後日手を加えられた部分が多く構成上も極めて複雑であるが、印刷上許される限りは元の形を伝え、ただ行数、註の書かれている位置等は必ずしも原文に従わなかった場合がある。それでも特に注意を要すると思われる場合には特記した。

(A) Kopie von der Universitätsbibliothek Marburg — Ms 925/38*
Savigny's Pandekten**

Alb(ert) v(on) Gröning
Berlin 1840/41***

[S. 30]****
Von der Anwendung der
Gesetze
oder
der Regeln des positiv. Rechtes je nach
Personen, Gegenständ(en) u(nd) Zeiten.

Die ursprüngliche Anwendbarkeit muß erst bestimmt werden, abstrahirt von allen Zeitveränderungen, u.

die successive Anwendbark(ei)t, d.h. mit Rücksicht auf die in der Zeit liegenden Abänderungen.—

A.) Die ursprüngl. Anwendbark(ei)t.

Alles positive Recht entsteht in irgend einem Staatsverbande, wo das Individuum als untergeordnet u. gebunden erscheint. Eine Staatsverbindung läßt sich denken in den verschiedensten Stufen bis zur engsten Gemeinde herab; jede aber hat zur Basis irgend eine volksmäßige Einheit, die nach verschiedenen Nationen u. Zeitaltern höchst verschieden ist:

Es kann als Grund dieser Einheit gelten

a.) ledigl. die volksmäß. Abstammung, die Nationalität, Band des Blutes; in den germanischen Staaten, die im Mittelalter entstanden auf den Trümmern des Röm. Reichs, findet sich dies besonders. Einzelne Überreste haben sich bloß von diesem Prinzip erhalten; im

*ブレードホルン (Bredehorn) 夫人のコメント。Pandekten (1-4) +5 522. 4°. Berlin WS 1840/41 Dunkel marmorierter Pappband; im Vorderdeckel Exlibris Albert v. Gröning. S.1-522 Pandekten Buch I-IV S. 452 ... 4. März 1841 S.1-5 (2. Zählung) Inhaltsverzeichnis zu Buch IV.

**Rückentitel. 前扉にはタイトルなし。

***Auf dem vorderen fliegenden Blatt. (ブレードホルン夫人のコメント)。

****Gröning 自身の頁建て。

Meisten bei den Juden, die in Ehesachen etc. noch besonderes Recht haben.

[S. 31] b.) das Prinzip des persönl. Staats= oder Bürgerverhältnisses, was sich in der größten Ausdehnung im alten Rom findet, wo civis, latinus u. s. w. nach verschiedenen Rechten leben, ja ganz verschiedene Rechtscapacität haben.—Einen sehr bestimmten Staatsbürgerbegriff haben wir heutzutage* eigentlich nicht, obschon er oft versuchsweise wieder hat hergestellt werden sollen.

c.) das Prinzip des Territorialverhältnisses, das Prinzip aller modernen Staaten, ohne Rücksicht auf Nationalität u. mit untergeordneter auf Staatsbürgerverhältnis**. Einheimische Unterthanen u. Fremde werden unterschieden. Im innersten Grunde haben alle 3 Prinzipien ein Gemeinschaftliches; in den einzelnen Gränzen herrscht aber sehr grosse Verschiedenheit.—

Welches unter verschiedenen Territorialrechten ist in jedem einzelnen Falle des Rechtsstreites anwendbar? Hier kann die Rede sein von Gesetzen desselben Staats oder verschiedner, z.B. ob auf irgend einen Handelsvertrag Märkisches oder Schlesisches Provinzialrecht anwendbar ist. Die verschiedenen Territorialrechte gelten für einen u. denselben Ort in verschiedner Abstufung u. Begränzung: dieser Fall kam schon vor bei dem im Deutschland geltenden gemeinen Recht, wo das Spezielle dem Generellen vorgeht***.

[S. 32] Ist die Rede von Territorialrecht verschiedner Orte: es kommt in Betracht 1.) das domicilium. 2.) der Ort, wo eine Sache sich aufhält, locus rei sitae, was besonders in Rede kommt bei Grundstücken. 3.) der Ort, an welchem gehandelt wird. Man unterschied neuerdings zw(ischen) statuta personalia, realia u. mixta: man sprach von statuta, weil die ganze Frage bes. bei Provinzialrechten vorkommt,

*heutzutage は後から付加されている。

**ohne 以下の文法構成について、Bredehorn 博士は untergeordneter の後に Rücksicht を, Staatsbürgerverhältnis に定冠詞 das を補うとよいと指摘されている。

***原文では Spezielle も Generelle も小文字で始まっているが、大文字に直した。

die man auch vorzugsweise *statuta* nennt; Bezieht sich die Frage auf das Persönl., dann von *domicil.*, auf Sachen, *res sita*, u. *stat. mixt.* der Ort der Handl.—

Das Recht erscheint als die juristische Eigenschaft einer Person. Welchem Rechtsgebiete die Person anhängt, ist zuerst zu fragen: die Person steht in mannichfachen Verhältnißen, namentl. publizistischen Verpflichtungen*, *munera*, die offenbar zusammenhängen mit der Einheit, an die sie gebunden ist: Gehorsam an die richterliche Obrigkeit; Gerichtsstand, *Forum*, was in der innig(s)ten Verbindung steht mit dem Rechte, dem er untergeord(ne)t ist.— Die Römer haben sehr wenig befriedigende Bestimmungen darüber: sie war auch von viel geringerer Wichtigkeit, als bei uns: diese Frage ist immer noch im Wachsen.

Origo u. *domicilium* sind zwei Gesichtspunkte, die festgehalten werden müssen:

[S. 33] der Geburtsort ist als solcher ganz gleichgültig, u. ist nicht unter *origo* zu denken; vielmehr das städtische Bürgerverhältniß, dem der Einzelne angehört, ist zu verstehen u. dies hat den innigsten Zusammenhang mit der durchs ganze Röm. Reich gehenden Verfassung: unzählige kleinere Stadtterritorien fanden sich durchweg in Italien u. dieses angeboren vom Vater auf Sohn forterbende Bürgerverhältniß ist *origo*.— In den Provinzen war es zum Theil auch so, zum Theil anders, wie in Ital(ien), mit den Territorialverfassungen; als Ital(ien) die Civität bekam, war die *origo* zwiefach, eine zwiefache Verpflichtung auf sein spezielles Bürgerverhältniß: er hat ein doppeltes *Forum*, d. h. einen doppelten publizist. =persönl. Verband: seit Caracalla hatte jeder Einwohner des Röm. R. eine doppelte *origo*: also hat jeder ein dreifaches Bindungsmittel, *domicilii forum*, *forum originis* in seiner Heimath u. in Rom.

Ist das örtliche Gesetz verschieden, so ist *origo* vorherrschend vor

*この部分書き損じによる訂正がある。

domicilium, u. das Recht des einzelnen Municipiums ging auch vor der groß(en) Röm. Verfass(ung) her.—

In unsrer Verf(assung) fehlt diese Grundlage städtischer Verfass(ung): ein dem Röm. entsprechender Begriff von origo hat bei uns nie existirt, denn mit dem Geburtsort hat es Nichts zu thun.

[S. 34] Übrig geblieben ist für uns ganz allein das forum domicilii, das denn auch viel größer(e) Ausdehnung hat: lex domicilii ist das Bestimmende für jeden Einzelnen.— Ausnahmen ganz allgemeiner Art giebt es: die Person kann gleichsam aus sich heraustreten u. mit fremdem Rechtsgebiete in Berührung kommen, insofern sie

- 1.) ihre Macht erstreckt auf juristische Sachen: durch diese neuen Beziehungen kann auch ein neues forum hinzuk(ommen). rei sitae jus.
- 2.) durch jur(istische) Handlungen tritt Jemand auch in Berührung mit einem ursprünzl. fremden Rechtsgebiete, u. so kann jetzt das Recht des* Ortes für ihn bindend werden, in welchem er gehandelt hat.

Praktische Regeln:

- 1.) Der absolute Zustand einer Person kann verändert werden; wo keine Beziehung auf andr(e) Individ(uen) oder Sachen** ist, wird Alles beurtheilt nach dem Rechte des domicilium, z.B. wenn nach der Volljährig(ei)t gefragt wird etc.
 - 2.) Es kann die Rede sein von der äußer(en) Form einer jurist(ischen) Handl(ung): hier ist die Regel, locus regit actum (Französische Schriftsteller); nicht das domicil(ium), sondern der Ort, wo man gerade zufällig handelt, giebt den Ausschlag: oft ist es gar nicht anders mögl., als einer jur(istischen) Handl. die Form zugeben***, die gerade an dem jedesmal. Aufenth(a)lt gefordert wird.
- [S. 35] (z.B. wenn ein in Frankr(eich) reisender Preuße sein Testament machen will). Es ist dies bloß als eine Begünstigung der Person anzusehen, nicht als eine absolute ausschließl. R(e)chtsregel.

*d(e)r と読めるが des の誤りか。

**oder Sachen は行間に追記されている。

***Zugeben は訂正されて挿入されている。

3.) Ist die Rede von Eigenthum an einzelnen Sachen, gilt das Recht des Orts, wo die Sache sich befindet. Jus rei sitae. Auf Grundstücke geht dieser Satz ganz allgemein, dagegen in Ansehung von Mobilien wird es oft bezweifelt, bes. hinsichtl. der Usucapion.

4.) Ist die Rede von Rechten, die aus jurist. Handlungen entstehen, contractl. Verbindungen gilt das Recht des Orts der Handlung*.— Wird der Contract nicht in persönl. Gegenwart geschlossen, sondern z. B. in Correspondenz;? Der Ort, der nun regulirend sein soll für diesen Contract, ist schwierig zu bestimmen: Viele haben gesagt, den müsse das Naturrecht entscheiden, was ja ganz unsicher ist: Vielmehr ist der Ort entscheidend, wo der Antrag nicht zuerst gestellt, sondern empfangen ist, beantwortet u. angenommen, denn früher kann ja von gar keinem Abschluß die Rede sein.— In einigen Fällen muß wegen eines gesetzten präsumtiven Willens die Sache anders entschieden werden, so der locus solutionis oft locus contractus: oft auch der Ort der Erklärung ganz gleichgültig u. untergeordnet.

[S. 36] 5.) Gesetze, die betreffen, nicht, wie vorher, Rechte am Einzelnen, sondern das Vermögen im Ganzen u. Großen, gehen nach dem Rechte des Wohnortes, weil das Rechtsregeln sind, die auch auf die Handlung = u. Rechtsfähig(ei)t im Ganzen gehen, so z. B. die Beziehungen der Ehe zum Vermögen d(a)s domicilium der Ehe ist an dem des Mannes, d. h. das dieser hat u. haben will vom Anfang der Ehe an; dies bleibt durchaus regulirend, auch bei späterer Veränderung des Domicils. Ebenso auch ein generelles Pfandrecht nach dem Domicil des Schuldners. Die Intestaterbfolge durchaus nicht nach dem Orte des Todes, sondern nach dem pos(itiven) R(e)cht des regelmäÙ. Wohnorts des Verstorb(e)nen, da das Erstere ja ganz zufällig ist**.

*欄外に l. 6 d. eviction. XXI, 2. l. 1, pr. l. 37, d. XXII, usur. l. l. 34 d. regul. jur. — という書き込み, 更に後からその各部のラテン語法源が追記されている。

**da 以下は後から書き加えられている。

Außerprivatrechtliche Regeln sind noch, : wenn die Rede vom Prozeß ist, richtet sich Alles nach dem Ort der Klage: — bei Polizeigesetzen sind Alle diesen unterworfen, wenn sie auch nur zufällig u. vorübergehend im Lande sind: — Strafgesetze entscheiden gewöhnlich auch immer im Lande für jeden Fremden, natürl. nur vorübergehend. Die im Ausland begangnen Verbrechen müssen eigentl. auch nach ausländischen Gesetzen bestraft werden, wovon allerdings auch Ausnahmen existiren, u. wohlbegründete:

[S. 37] Wenn z.B. Einer belangt ist wegen Verbrechen in unserem Lande u. nun auch welche zu Tage kommen, die im Auslande begangen sind, so werden alle nach unserem Gesetze bestraft: u. sonst könnten ja alle Mörder sich ungestraft jenseits der Gränze aufhalten*. —

*欄外に Landrecht, II, 20, 14. 15. と記されている。

(B) Kopie von der Universitätsbibliothek Marburg — Ms 925/37, 1.
Pandekten*[Bl. 48]
(4¹)**§ 18-22 Jus non scriptum — s. o. Einl.
(9-13)***

(§ 14-20)

(gehört nur
zur succeß.
Anwendbark.
s. u. 4^a.****)Anwendung der Gesetze, ja nach Personen, G(e)g(en)ständen u.
Zeiten — verwickelte Fragen.

Nähere Bestim(mun)g der Aufgabe — gewöhnl. wird gedacht an e(ine) Collision zwischen einz(elen) Ges(etzen) u(nd) das ist der einfachste Fall, z. B. b(ey) früheren u(nd) späteren Ges(etzen) — aber auch denkbar 1.) b(ey) Einführung e(ines) neuen Ges(etz)buchs, z. B. Reception e(ines) fremden R(echt)s (Code Nap(oléon)) 2.) bey Unterwerf(un)g unter e(inen) andern Staat u(nd) dessen R(echts)quell(en) im Ganzen — in diesen Fällen nicht bloß b(ey) Ges(etz) sondern auch b(ey) Gewohnheitsr(echt).

Nun üb(er)h(au)pt zwey Fragen f(ür) die Anwend(un)g der Sätze e(ines) positiven R(echt)s:

- I. Ursprüngl. Anwendbarkeit, d. h. abstrahirt v. allen in der Zeit eintretenden Veränderung(en).
 - II. Successive Anwendbarkeit, d. h. mit Rücksicht auf zeitliche Änder(un)g(en) des Rechts.
- I. Ursprüngl. Anwendbarkeit. Alles positive Recht entsteht in e(inem) Staatsverband, in welchem die einz(elne)

*Ms 925/37 にはサヴィニーによりこのタイトルが付されている。プレーデホルン夫人のコメントを記す。4 konv. 4^o. Landshut, Berlin SS 1809, WS 1809/1810, SS 1811 bis WS 1841/42. I. Konvolut, Schwarze Kapsel mit Rückentitel (Bleistift) von Savignys Hand Pandekten I. Wz IMK (? am Rande beschnitten). Ms 925/37, 1 の Bl. 1-30 が講義の時間数等の記録, Bl. 31 からは講義のノートである (前書き参照)。

**[] 内は整理の為に図書館が付した Blatt Nr. であり, () 内の数字がサヴィニー自身によるページ・ナンバーである。

***前書きで述べたようにサヴィニーは当初 Heise に従っていた構成を, その後少くとも編別・順序において変更していたことが確認できる。Ms 925/2002 の S. 11 に記されたサヴィニー自身の新構成から § 18-22 は新しい編成であり (9-13) 及び (§ 14-20) はハイゼの編成番号であったことが確認できる。因に, (§ 14-20) の上に本来 § 25-27 が入るべきであったと推測される。

****以下においてもこのように欄外の書き込みが多いが, この部分の再現は, 凡例でふれたように極力サヴィニー自身の用いた略記に従って行う。スペースの関係からやむをえないが, 本文から概ね誤解なく理解しうるであろう。

Person als* solche, mit ihrem Willen, als untergeordnet u(nd) gebunden erscheint — übrigens in verschied(enen) Stufen, v. Staat im Großen bis zur engst(en) Gemeine herab. Jeder Verein dieser Art hat zur Basis irgend e(ine) volksmäßige Einheit, aber die genaue Begränz(un)g ist in verschiedenen Zeitaltern höchst verschieden. Hauptfälle die dabei vorkommen :

- A.) Volksabstammung die Gränze bestimmend, also Nationalität als Basis dienend — so b(ey) den persönl. Recht(en) im Mittelalter — dann das Territorialverhältniß ganz** unbeachtet, außer insoferne die öffentl. Gewalt nur innerhalb gewisser Gränz(en) wirksam ist — in neueren Zeit(en) fast ganz verschwund(en) (nur für die Juden großenth(ei)l(s) erhalt(en) — hier b(ey) uns durch das Judenedict § 20. 21 aufgehob(en)+)
- B.) Persönl. Staatsverhältniß so im alt(en) Rom (th(ei)l(s) f(ür) Capacität, th(ei)l(s) auch f(ür) Recht wornach man lebt)++ — Verschiedenh(eit) v. jenem ersten — in neuer(en) Zeit(en) meist verschwunden (b(ey) uns kein bestimmter Staatsbürgerbegriff).

+NB. Nun wird die Idee der Nationalität wieder viel hervorgehoben, doch in ander(em) Sinn***

++NB. ganz besonders in der origo der Römer s. u.

*als は書き直されている。

**ganz の後に zur が消されている。

***この部分は恐らく一番後から鉛筆で書き加えられたものであり、完全に読みとることが極めて困難であったので、Bredehorn 博士にお願いして原本に当て頂いた。しかし、wird の後に Bredehorn 博士も (?) を付されているので、或いは他の解釈もありうるかもしれない。後の++は、サヴィニーの記号上は本来+であったが、この部分と区別するために++とした。

[Bl. 49]
(4^{m.} 1)

- C.) Landgebiet od. Territorialverhältniß — dieses das Princip aller modernen Staaten, also* Territorialrecht in den verschiedenst(en) Abstuf(un)g(en) bis zu Stadt= u(nd) Dorfrecht. — Nun Abstamm(un)g ganz verschwindend, Staatsverhältniß zurücktretend. Hauptbegriffe:
Einwohner (Unterthan), Fremder.
NB. Der Grundidee nach mit jenen erst(en) Verhältniss(en) verwandt(en), besonders in der genau(er)en Begränz(un)g abweichend.
- Anwend(un)g im Einzelnen — Welches unter mehr(eren) Territorialrechten in jedem einz(elnen) Fall anwendbar?
(Ges(etz) desselben Staats od. verschiedener Staat(en)?
im ganz(en) gl(eich)gültig — Beysp(iel).**
- A.) Territorialrechte, die in verschiedener Abstufung f(ür) denselben Ort gelt(en) — z. B. b(ey) uns: Landrecht, Märk(isches) Prov(inzial)r(echt), Berliner Stadtr(echt).
Das Specielle geht dem Generellen vor.

*also の前に „in den verschiedensten“ という部分が削除されている。

**又は Beysp(iele)。以下の Beysp. についても同じ。

B.) Territorialrechte verschiedener Orte — Beysp.*

Hert de collisione legum sect. 4 (Comm. et opusc.

vol. 1) — brauchbares Detail

Mühlenbruch I. §§* 72, 73 — gut und viele Literatur.

Zachariae liber quaest., qu. 1 — gar schlecht.

Did.*** Meier de conflictu legum diversarum in div. locis

obtinentium Bremae 1810. 8. — nicht recht klar gedacht,

aber manches brauchbare Detail.

Wening Lehrbuch b. 1 § 19. 20.

Mittermaier Krit. Zeitschr. des Auslandes B. 7 H. 2 S. 228.

NB. leg. 1. Struve Rechtsgesetz 2. Eichhorn deutsches R(echt) § 34-37.

leg. Zachariä üb(er) locus regit actum in Elvers

Themis B. 2 H. 1, S. 95-118.

Es kommen dreyer(lei) Bestimm(un)gsgründe vor:

1.) domicilium

B(ey) Vagabund(en) als Surrogat: Herkunft

Meier p. 14. Hert. § 26. (L. R. Einl. § 25. 26)****

B. 2 domicil.? das erste? oder das hauptsächl.?

Hert. § 8. (das erste, Meier p. 76)

das w(a)s dem Geschäft am günstigst(en)

ist? L. R. Einl. § 27. vgl. jedoch § 29. 30.

2.) res sita — n(ach) Meier p. 17. ist locus rei sitae

b(ey) mobil. immer das domicil. domini, — falsch*****

3.) Ort wo e(ine) Handl. geschieht.

Gewöhnl. Lehre: Statuta personalia, realia, mixta: domic. res sita, Handl.

Hert. § 3 p. — Ungenügend, genauere Bestim(mun)g nöthig.

*この行の下に Hier Kommen dreyerl(ei) Bestimmungsgründe vor: 1.) domicilium が二行にわたり横線で消されている。

**152, 153 ... g. が横線で消されている。

***ブレデホルン博士によればこれは Diedrich の略であるという。なお、この Meier の項全体が、後から付加されたように、字が異っている。但し、もともと一行文スペースはあけてあった。尤も、結局スペースが足りず、欄外にまで書きこまれている。

****... vgl. jedoch § 29-31. 又 § 31 が横線で消されている。

*****n. Meier 以下 falsch までは後から追記されている。

[Bl. 50]
(4^{m.} 2)

Das R(echt) ist e(ine) jurist(ische) Eigenschaft e(iner) bestimmt(en) Person —
Regel also: dasjenige R(echt) welches in dem * Rechtsgebiet dieser Person herrscht — (nachher Ausnahm(en)) — welches ist dieses Rechtsgebiet? Zusammenhang mit ander(en) Verhältn(issen) der Person — publ. Verpflicht(un)g zu munera — Gehorsam g(e)g(en) magistratus (forum), also auch Gehorsam g(e)g(en) örtl. Ges(etz) — also natürl. Zusammenhang zwisch(en) forum u(nd) anwendbar(en) örtl. Ges(etzen). — warum das b(ey) den Römern weniger wichtig war als bey uns — weniger Verkehr mit Ausland, weniger Abweichung in Innern**

Wo nun dieses Alles?

Röm. Lehre v. origo u(nd) domicil.

origo — ja nicht Geburtsort, sondern städtisches Bürgerverhältnis (s. o.), fortgepflanzt durch Geburt v. e(inem) bestimmt(en) Vater+ —***

domicil(ium), fester Wohnsitz (s. u. nähere Bestim(mun)g), mit origo zufällig identisch od. nicht — Beysp.

Anwend(un)g auf die obig(en) Prakt(ischen) Folg(en) —

Verpfl. an beid(en) Ort(en) — wie das b(ey) forum wirkt (Wahlrecht des Klägers)** — b(ey) Ges(etzen)

unmögl, also? ohne Zweifel origo, als das Wichtigere u(nd) das Ursprüngl., nicht durch Willkühr aufzuhebende.+++

Anwend(un)g auf uns — origo in jenem Sinn verstand(en) —

Erkl(ärung) — domic(ilium) allein übrig — also auch lex domicilii — wichtigste Anwend(un)g s. u. I. 5.

jetzt erst das Territorialverhältnis ganz rein herrschend.

+ publ. Grundlage dieser Ansicht — NB. seit der Civität v. Italien u. dann im ganz(en) Reich zweifache origo

++ nun dreyfaches forum s. o.

+++ u. nun die lex loci der lex v. Rom vorgehend als das Speziellere

*örtl. が横線で消されているが、語の下には、... と強調している。

**warum 以下 Innern までは後からの書き込み。

***Vater — の後に Anwe が横線で消されている。

[Bl. 50v]

Ausnahmen dieser Regel, da wo die Person gewissermaßen aus sich heraustritt, u. mit e(inem) ihr fremd(en) Gebiet in Berühr(un)g kommt:

- a.) Recht an einz(elnen) Sach(en), in derem Gebiet sich die Person begiebt — rei sitae s. 3.
- b.) Obl(igation) — Collision zwischen bestimmt(en) Indiv(iduen) u(nd) Ihrem R(echt) — vermittelt durch Ort der Obl., als dem sie beide umfassend(en) unsichtbar(en) Band —
wo ist dieser?
in der Regel: locus contractus — s. 4.
ausnahmsweise: locus solut(ionis), wo dieser besonders bestimmt ist, weil nun die Partey(en) durch Willkühr die Obl. dahin verlegt hab(en).
- c.) Äußere Form juristischer Handl. — locus regit actum — s. 2.
Ist nur Vergünstig(un)g, auf natürl. Billigk(eit) gegründet, das G(e)g(en)th(ei)l oft sehr schwierig od. unmögl. —
darum auch Wahlr(echt), wo beides mögl. ist.

[Bl. 51]

(4ⁿ)

Ist ungenügend — genauere Bestimm(un)g nöthig.*

1.) Ges(etz) üb(er) Zustand e(iner) Person
absolut, d. h. ohne Rücksicht auf Sachen, u. auch
ohne Beziehung auf e(in) bestimmtes Familien-
rechtsverhältniß zu Andern — domicil.

Beysp. Ende der minor aetas — prodigus —

infamis⁺ — (? fil. fam.?)

(Hert. § 5. 8. 11. 17.) — Meier p. 13. p. 32-35.**

(L. R. Einl. § 23-27.

(Verändertes domicil. ändert die Qualität,

Hert. § 8 § 5 in f(ine). Meier p. 16.***

2.) üb(er) äußere Form e(iner) Handl. — locus regit actum.

Hert. § 7. 10. 23.— Chabot II. 401 (Testament)

Ausn(ahme) L. R. Einl. § 23 b(ey) Provinzialformen, die⁺⁺

3.) üb(er) dingl. R(echt) an einzeln(en) Sach(en) —

rei sitae⁺⁺⁺, auch b(ey) mobil. (nicht alg(emein)

anerkannt, aus Verwechsl(ung) mit den folg(enden)

Fäll(en)) — Beysp. Usucapion, ferner :

Versag(un)g der vindic(atio) an res mobil.,

+ ? anders b. infamis u.
prodigus n. Meier p. 33,
weil das die Natur
eines Strafurtheils habe.

++ nur f. die Handl. der
Einwohner der Provinz
gelten sollen.— Meier
p. 20. 57. macht mit
Recht e. Ausn. b.
denjenig. Formen
welche die Veräußerg
e. bestimmt einz. Sache
betr., da geht res sita
vor.

+++ auch für die
Fähigkeit ds Erwerbers
u. Veräußerers Meier
p. 36.

*この行の前に Gewöhnl. Lehre : statuta personalia : domic.

—— realia : res sita

—— mixta : Handl.

Hert. § 3p

という部分が横線で消されている。

**Meier 以下の部分は後からの書き込み。

***§ 5 inf. は下の行への書き込み。Meier p. 16. は追記の模様。

Entsteh(un)g e(iner) hyp(otheca) tacita specialis
 Wening l. c. — Meier misversteht b(ey) mobil. den
 Begriff v. locus rei sitae s. o., außerdem hat er das
 Princip richtig anerkannt bey hyp. gen. u. spec. (p. 39-41).
 — Bey usuc. rerum mobil. nimmt er p. 37. das domicil.
 usucapientis an nicht das domicil. domini, weil jener schon
 publ. actio, also domin(ium) natur(ale) habe (!)

- 4.) Obl. aus Handl., besonders Contracten —
Ort der Handl.+, nicht blos bestimmend
 f(ür) die äußere Form (s. o.), sondern auch
 für die Wirk(un)g(en), z. B. Eviction, Zinsen pp
L. 6 de evict. L. 1 pr. L. 37 de usur.
L. 34 de R. J.
 Hert. § 7. 10. 23. Meier p. 20-21 p. 57 pp
 (Zinsen: Meier p. 60. 61).***
 (Weber S. 178-181 meynt, b(ey) Ges(etzen),
 die das Kl(age)r(echt) gestatt(en) od. negir(en)
 müsse der Ort der Kl(age) entscheid(en) !!
 (Auch b(ey) res judic. in civilibus. Meier 29. 30.****
 NB.**** für die Wirk(un)g ist das++ int(e)rpr.
 vol., daher auch in einz(elen) Fäll(en)
 u. nach Umständ(en) anders zu
 beurth(ei)l(en).+++ — z. B. wenn zwey
 Bewohner desselb(en) Orts zufällig an
 demselb(en) fremd(en) Ort z.B. im Bade
 contrahi(ren), so haben sie doch wahrsch(einlich)
 an das gemeinsame R(echt) ihrer Heimath

+ NB, besonders
 wichtig bey Wechsel-
 fähigkeit*
 ? persönl. Fähigk. zu
 diesem besonder(en)
 Geschäft, z. B. Velle-
 janum ? n. domicil.
 Chabot II. 352. (?
 diss. Meier p. 14)**

++ größenthl. (denn
 es gilt ja auch
 b. Ges. üb.
 erlaubte Zinsen,
 Spielschuld pp

+++vgl. L. 65 de jud.

gedacht.++++ Hert. § 10.
 (Ort der Handl., nicht der Zahlung od. der
 Confirmation. Meier p. 58.

++++ Gränze: wenn
 die Erfüllg üb.
 dies(en) zufälligen
 Aufenthalt hinausgeht.

(?Contract durch Correspondenz? nun nach Einig(en)

+++++ bey
 zweyseitig. Obl.
 ds domicil. ds
 Bekl.*****

Naturrecht ! Hert. § 56. Besser: domicil. debitoris.+++++

(Meier p. 59: locus
 epist. acceptae

Concurs n(ach) domicil. debitoris, außer
 immob. Hert. § 64.

Meier 67.68 (außer
 hyp. spec.)

Kl(age)verjährung n(ach) Ort der Obl.

Hert. § 65. — n(ach) Ort der Kl(age)

Meier 62.

restitutio in int(egrum) n(ach) locus causae ejus.

Hert. § 66.

— Ort der kl(age)
 Meier 63.*****

*この部分は更に後から追加されている。NB は当初 ?persönl. …… II. 352 まであったと思われる。

**(? diss. Meier p. 14) は NB に後から付け加えられている。

***Meier p. 20-21 以下 () 内まで後からの付加。特に () 内は右の欄外にまで及ぶ。次行の (Weber……!! も、後から追加されたものらしく、欄外にまで書き込まれている。

**** (Auch……以下後日の付加と思われる。

*****NB の前に ! がおかれ、NB, のようになっており、gedacht+++ の行も又 |ge…とされている。

*****この下に、NB. s. Beyl(age)++++ という部分が横線で消されている。更にその下に、縦横等の線が引かれているが趣旨不明。

*****右側欄外に書かれている Meier …… の部分は全て後の付加による。Meier の著作の参照は、従って、全て後からの追加であったといえる。

5.) Ges(etz) üb(er) Vermögen im Allg(emeinen) — domicil.

Wening l. c. — Meier p. 19: Grund, weil das für das Vermög(en) locus rei sitae ist.*

Jedoch noch folg(ende) Unterscheid(un)g: diese Ges(etze) betr(effen)**

a.) th(ei)l(s) die Mögl(ich)k(eit) od. Nothw(endigkeit) gewisser Handl. — dann b(ey) immob.:

res sita, b(ey) mobil. u. incorp.: domicil.

b.) od. int(e)rpr(etatio) voluntatis: allg(emein) domicil. auch f(ür) auswärtig(e) immobil.

Anwend(un)g***

Dispositionsfähigk(eit) des minor, fil. fam., der Ehefrau. Hert. § 6. 9. 22.

Ehe in ihren Wirk(un)g(en) auf Vermög(en), Gütergemeinsch(aft) pp — domicil. mariti

(i. e. matrim(onium)) Hert. § 10. 39. 46. 47.

Chabot I. p. 81. (? anders b(ey)

immob. die man vor der Ehe auswärts

besaß? Chabot I. p. 84

d. h. das domic(i)l. was der Mann v. der Ehe an hat u. haben will, so daß nichts an-

*Meier 以下は後からの書き込みのように見える。

**Jedoch … の前に Anwendungen: Dispositionsfähigk(eit) des minor, fil. fam., der uxor が消されている。

*** ** からいえば Anwendungen と読むべきか。これまでの Anwendung の読み方にもかかわる。

kommt auf Ort der geschloss(enen)

Ehe od. Dotalverträge. Chabot I. 85. 87. — Meier

(arg. L. 65 de jud.)

p. 34. 41-46.*

Dieses R(echt) bleibt, auch b(ey) später
verändert(em) domicil. Hert. § 48. 49. 51.

Meier p. 47.**

Generelles Pfandreht. Meier p. 39-41. (sowohl hyp. tac.

als privil.)***

Testament, was die test. factio, Pflichth(ei)l
betr(iff) (äußere Form? s. o.),

Int(e)rpr(e)tation p Meier p. 48 pp (? b. Legaten res

sita? p. 51)****

Intestaterbfolge — soweit sie interpr. vol.

ist: domicil allg(emein), soweit gewisse

G(e)g(en)stände der frey(en) Verfügung

entzogen) sind: b(ey) immob. res sita. Ort des

Todes gl(eich)gültig.*****

Hert. § 26. 40. Meier p. 55 (ohne distinction).*****

(Nun also vielleicht 2 Erbschaft(en), dann

die Schuld(en) verth(ei)l(t) nach ihrer c(aus)a, in subsid(ium)

pro portione. Hert. § 29.

Peculium Meier p. 46.

Tutel n(ach) domicil. pupilli. Meier p. 35.*****

(NB. Auf diese Distinct(ion) sind wohl auch die

etwas unbestimmt(en) Regeln des L. R. zu reducir(en):

a.) bewegl. Vermög(en) domicil. b.) unbewegl.

res sita. L. R. Einl. § 28-32.

* ** *** ****いづれも Meier が後から付加されており、一部欄外に書かれている。

尚、**の段落の Dieses の左横に斜線が引かれている。***の Generelles には「G…の線、****の段落には Testament と betr. に□の線が入っている。

*****Ort … gültig は欄外に付記されている。

*****Meier 以下は後の書き加え。

*****同上。

{Bl. 53}

(4p)

+ NB. Meier p. 65. 66.
rechnet zum Prozeß-
recht auch das
benef. competentiae
u. die exc. non
num. pec. weil
sie die Execution od.
den Beweis
betrif.(?)

6.) Diese Regeln betr(effen) das materielle Privatrecht.
Fernere Regeln üb(er) andere Rechtsteile:

a.) Prozeß — Ort der Klage⁺

b.) Polizeyges(etze) — verpflichten allg(emein)
Alle, die sich im Lande aufhalt(en), Einheimische
u(nd) Fremde, also ohne Rücksicht auf domicil.

c.) Strafgesetze ?

a.) Verbrechen in unsrem Lande — nach unsren
Ges(etzen) bestraft, ohne Unterschied ob e(in)
Einwohner od. Fremder der Verbrecher ist. —
Versteht sich, wenn wir des Verbrechers mächtig
sind, denn Ausliefer(un)g ist Sache des
Völkerrechts (Verträge od. Verwillig(un)g),
nicht des Crim(inal)rechts.
(L. R. II. 20 § 12. 13)

b.) Verbrechen im Auslande —

Nach L. R. II. 20 § 14. 15 ist hier auch der Fremde
in unsren Gerichten zu bestrafen (also gewiß
um so mehr unser Unterthan, was nicht gesagt ist)
u(nd) zwar nach den Ges(etzen) des delicti commissi,
außer wenn unsre Ges(etze) gelinder sind (also
auch gar nicht wenn unsre Ges(etze) gar keine
Strafe haben). Diese Ausn(ahme) beruht auf
Billigk(eit), die

[Bl. 53v]

Regel üb(er) das auswärtige Strafges(etz)
 ist sehr natürl. — aber sind die auswärtig(en)
 Verbrechen üb(er)h(au)pt in unsr(en) Gericht(en) strafbar?
 B(ey) unsren Unterthan(en) müßte man wohl
 unterscheid(en) zwisch(en) delict(um) co(mmun)e
 (Mord, Diebstahl) u. speciale (Zolldefraude);
 b(ey) den lezt(eren) nicht strafbar. Das findet
 sich aber schon mit in der obig(en) Ausn(ahme),
 da z. B. unsre Ges(etze) auf Verletz(un)g der
französ(ischen) Zollvorschriften gar keine Strafe drohen.
 B(ey) Fremden eigentl. kein allg(emeiner)
 R(echts)grund der Strafbar(keit), aber a.)
 bey delict. coe ist es das einfachste Mittel, die
 Ausliefer(un)g ohne Unbillig(keit) abzuwend(en).
 b.) bey delict. spec. kann es zum Schutz
 unsrer Staatsanstalt(en) nöthig seyn, bedarf aber
 dann e(ines) besonderen Ges(etzes) (was jedoch
 niemals dem Verbrecher publicirt war !!). —
 Vgl. unser Ges(etz) üb(er) Münzverbrech(en) im
 Ausland, u. die Staatsrathsverhandl(ungen) darüber.

Anm : B(ey) diesen Regeln sind positive Ausn(ahmen) durch
 durchgreif(ende) Ges(etze) denkbar — kommen seltner vor als
 b(ey) der zeitl. Collision (s. u.) — zuweilen mit diesen
 lezt(eren) Ausn(ahmen) zusammenfallend (Beysp. b(ey) unehel.
 Kindern n(ach) franz(ösischem) R(echt), ist Ausn(ahme) in
 beiderl(ei) Sinn — Beysp.)